

# なみまち倶楽部による農泊の活動を通じた コミュニティづくり

主事研究員 佐藤彩生

農泊は、地域資源を活用した観光コンテンツ提供を通じて、観光消費増による雇用創出や関係人口創出を目指す農村振興施策であり、近年、地域づくりやコミュニティづくりに資する農泊の活動が期待されている(注1)。

ここでは、農泊の活動を通して様々なコミュニティづくりに成功している、福井県あわら市波松地区の「一般社団法人なみまち倶楽部(以下、なみまち倶楽部)」の事例を紹介する。

## 1 波松地区となみまち倶楽部の概要

福井県の最北端に位置する、あわら市波松地区(注2)は、人口427人、世帯数170世帯、高齢化率65.6%の地域である。農家軒数は30軒で、梨、スイカ、メロン、ブドウ、さつまいも、ネギの栽培が盛んである。

地区内の子供の減少により2016年に波松小学校が休校した。これを受け、小学校の利活用、および波松地区の活性化を目的に「なみまち倶楽部」(注3)が2019年4月に設立された。同倶楽部は、波松地区の自治会の役員経験者20人で構成された有志チームで、「波松農泊推進協議会」の中心を担う。

農泊の活動体制は、なみまち倶楽部のコアメンバー9人がチーフとなり、こども会や後述する松寿会と協力してつくられた複数の有志チームで構成されている。その活動は、キス投げ釣り体験、流木アート体験、マイ梨づくり体験、波松ムラロゲイニング、小学校の環境整備などで(第1表)、体験の参加者数は

第1表 なみまち倶楽部の農泊の活動内容

①キス投げ釣り体験	⑨薪づくり
②流木アート体験	⑩波松ムラロゲイニング
③甘塩づくり&絶品試食会	⑪作陶体験
④ビーチコーミング	⑫コンサートの開催・会場提供
⑤レジン体験「ゆめ鯨」	⑬なみまちギャラリーの展示
⑥地引網体験	⑭レコードの管理
⑦マイ梨づくり体験	⑮スケートボード大会
⑧さつまいもづくり体験	⑯小学校の環境整備

資料 ヒアリングを基に筆者作成

年間500人ほどである。流木アート体験や甘塩づくり、レジン体験、コンサート、なみまちギャラリー、レコードの管理、スケートボード大会等の活動は小学校で実施される。

## 2 波松版謎解き「波松ムラロゲイニング」

波松ムラロゲイニングは、地区内にあるクイズのチェックポイントを制限時間内に周り、複数のチームで獲得点を競う謎解きゲームで、地元住民が準備し、県内の子供たちがプレイヤーとなる。

クイズの内容は、「波松海岸の看板のキャッチフレーズの文字の色」「白髯神社の階段の数」など、地元住民が地域を注意深く観察し毎年新しくつくる。クイズには地元住民の遊び心も込められており、高齢の地元住民しか答えを知らない昔の散髪屋の料金をクイズにすることで、子供たちと地元住民の交流の機会が生まれている。

## 3 活動のサポートメンバー「松寿会」

なみまち倶楽部の活動は、地区に住む65歳以上の全住民280人が加入する「松寿会」によって支えられている。同団体は、ビーチキーパー、スクールキーパー、畑せんせいなどの8部会で構成されている(第2表)。

松寿会の会員は各々の興味に合わせて複数の部会に入ることができ、部会の活動はなみ

第2表 松寿会の部会の概要

部会の名称	活動内容
①ビーチキーパー	波松海岸の清掃
②スクールキーパー	波松小学校の校内の清掃や草取り
③神社キーパー	白髯神社の運営のサポート
④フラワーキーパー	波松小学校付近にある花壇の整備
⑤甘塩づくり部会	海水から塩を精製
⑥くじら汁づくり	11月に開催されるイベントでのくじら汁の提供
⑦薪づくり	大根のはさ掛け用のはさ木を加工して販売(1束500円)
⑧畑せんせい	農業関連のアクティビティ時の体験指導

資料 ヒアリングを基に筆者作成



写真1 ビーチキーパーの活動の様子(なみまち倶楽部提供)

まち倶楽部の農泊の活動と連携している。例えばビーチキーパーの部会では、年3回の波松海岸の清掃に参加し、拾った貝殻、シーグラス、流木をなみまち倶楽部の流木アート体験の材料に提供している(写真1)。

この活動の面白い点は、拾った貝殻等が地域独自の相場に基づき地域通貨「びな」(注4)に交換され、地元住民が運営する「なみまちCAFE」(注5)の飲食代金の支払いにびなが使用できることである。赤色のシーグラスや薄いタコ貝の貝殻は希少なことからびなも高く、部会員は珍しい漂流物を見つけようと熱心に清掃活動に取り組んでいる。さらに獲得したびなを使いCAFEで仲間同士での団らんを楽しんでいる。

(注1)農泊とは「農山漁村に宿泊し、滞在中に地域資源を活用した食事や体験等を楽しむ『農山漁村滞在型旅行』」を指す。農泊地域は2024年度末で全国に673か所ある。農林水産省では、「地域の『食』を最大限活用する取組み」と「都市と農村をつなぐ架け橋となる取組み」の2つを通じて、農泊が総合的な地域づくりに向けた起点になり得ることを示している。

(注2)波松、城、城新田、十三、番堂野の5区で波松地区は構成されている。

(注3)「なみまち倶楽部」の名称は、釣りやサーフィン、地引き網など、四季を通して「いい波を待つ」人たちでにぎわうムラという意味から名付けられている。

(注4)びなの語源は、「び」は払うの「ペイ」から、「な」は「波松」からとっている。

(注5)同CAFEは、なみまち倶楽部の副代表が経営主となり、60代の女性を中心とするスタッフが土日働いている。小学校内で開催されるコンサートや個展、イベントなどでのCAFEの利用客も多く、利用者数は年間3,000人程度。

また、畑せんせい部会はなみまち倶楽部のマイ梨づくり体験等と連携し、元農家が農業の知識を生かしてガイドや体験をサポートしている。

#### 4 コミュニティづくりに資する農泊の活動の要点

本事例では、農泊の活動に伴い複数の有志チームをつくることを通して、様々なコミュニティがつけられていた。事例を踏まえて、コミュニティづくりに資する農泊の活動での要点を挙げる。

1点目は、農泊の活動により、休校となった小学校をコミュニティづくりの新たな拠点にしたことである。事例では、小学校を活用し、様々な体験の提供、CAFEの利用、イベント会場など、有志チームや地元住民が集える新たな拠点となっている。

2点目は、農泊の活動が既存コミュニティとの連携を通して、さらに複数のコミュニティをつくっていることである。本事例では、松寿会が農泊の活動のサポートメンバーとなることで、多数の有志チームづくりを可能にしていた。

3点目は、農泊の活動内容が多岐にわたることから、興味や関心、生きがい、知識の発揮などの個々人の動機で、地元住民が活動に参加しやすいことである。波松ムラロゲイングやビーチキーパー、畑せんせいなど、地元住民が個々人の動機で活動に参加し、仲間同士での交流を通して新たなコミュニティがつけられていた。

さいごに、コミュニティづくりにおいて農泊の活動の重要性が確認された本事例は、人口急減に伴いコミュニティ維持の課題を抱える農村や小学校が休校・廃校となった地域での地域づくりの方策として、示唆に富むと言える。

#### <参考>

・農林水産省(2026)「農泊をめぐる状況について」  
[https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/nouhakuuinshin/attach/pdf/nouhaku\\_top-131.pdf](https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/nouhakuuinshin/attach/pdf/nouhaku_top-131.pdf)  
(2026年5月26日アクセス)

(さとう さき)